

---

# 珈琲とバイトと先輩と俺と

ちよん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

珈琲とバイトと先輩と俺と

### 【ZPDF】

N47080

### 【作者名】

ぢょん

### 【あらすじ】

とある喫茶店で、静かに展開する恋愛の話です。秋の空気を思いつきり吸い込んだような、甘くて、冷たくて、清々しい話…になつてるといいなあ

## 第一話（前書き）

### 注意書

この話は、小説のタイトルにある通り多分に珈琲の蘊蓄が語られます

それらは俺のバイト経験に依るものが多く、知識の漏洩は禁じられてまして、申し訳ありませんが表現をぼかさせて頂くシーンが幾つか有ります

すみません

てかこの話、どこの掲示板で連載させて頂いてたんですけど…  
うらゐを間違つて紛失してしまい、更には名前も失念してしまつて  
行くことが出来なくなつてしまひました。orz

この話を聞いて下さつた方の中で、知つてる…という方が居られ  
ましたら一報頂ければとても助かります。orz

## 第一話

俺は、マグにそつと口をつけた。

それを持った右手が熱い。

マグを傾け　舌先に訪れる、爽やかな苦さ。

ああ、うまい。

そのまま、舌全体を使って液体を転がす。

こりり、こりり。

やがて、口中に走る苦味に慣れると来るのは濃厚な香り。口中から鼻へと、すっと立ち上がるようだ。

……この感覚が病み付きになる。

やつと一口目を飲み込むと、水面から立ち込める湯気で遊ぶ。息を吹き掛けると、立ち込める湯気と香り。鼻腔がくすぐられ、直ぐに飲みたくなってしまう。

その欲求に従い、再びマグに口をつけた。マグの中で揺らめく、琥珀色の液体を見ながら味を楽しむ。……お湯を通してだけなのに、何故こんなにも艶やかな色合いが出るのだろうか。

と、二口目を嚥下すると、やっぱり俺は思つのだ。

やっぱ、珈琲最高。

「つめられ」

……今俺が飲んでいるのは、アメリカンコーヒーだ。

アメリカンコーヒーと言えば、コーヒーをお湯でわったものだと一般的に知られているが。それは間違いだと、声を上げて言いたい。そう、それは間違っているのだ。

アメリカンコーヒーとは、第一次世界戦争以後におけるアメリカのそれをまねた珈琲であり、その濃度は豆を少し浅く煎ったものだ。珈琲豆は煎る時間が長ければ長いほど風味が出る。即ち、苦味

が増す。

アメリカン「コーヒー」とは、だから酸味の方が強いのである。苦いのが苦手な人でも、意外とすんなり飲めるからお薦めだ。

因みに余談だが、珈琲の味の世界的な基準には、アメリカン「コーヒー」は無いらしい。これが存在するのは、アジア圏内だけだとか。こないだのテストの為に、必死で身につけた知識である。……バイトにも、試験を要求するのは如何なものなのだろうか。まあ、その結果により時給がアップしたのだから、嬉しいっちゃあ嬉しいのだけど。

俺は、パイプ椅子をギシリと音たてながら伸びをした。

そして、いつの間にか減っていた珈琲を見ながら溜め息一つ。

「 休憩時間中悪いんだけどさ、ちょっとフレンチトースト作つて貰つていーい？」

「分かりました」

扉が開き、バックヤード　　スタッフの休憩室のよつなものだに顔を出した先輩に返事を返す。

「 ありがと!」

にぱつと人好きのする笑顔と揺れ動くボニー・テールをくれた先輩。しかし、すぐに踵を返して店内へと戻る。切羽詰まつてゐるのだろう。……とりあえず。

いくらバイト歴が長いからといって、平日一人で店を回せというのは……オーナー、鬼畜ではないだろうか。

最後の一 口を、味わうこともなく飲み込むと、お客様のオーダーを作ろうと席を立つた。

レジの横に置いてある、テイクフリーランチの山。それが崩れているので、軽く積み直す。

つるつるとした手触りのそれには『暖かい珈琲と、店内を満たす木の優しい香り。特別な一杯を提供します。Graceful Coffe』と、書かれていた。

黒いエプロンが、濡れた手を何回も拭つたためかごわごわして気持ち悪い。テーブルから回収した灰皿をたわしで水洗いしながら、レジ打ちをする先輩を見詰める。

黒羽瑞希。くろはみずき。一つ年上で、高校三年生。

後ろ姿のために表情は見えないが、先輩が体を動かすたびにぴこぴことポニーテールが揺れ動く。

と、振り向いた拍子に目が合つ。

えくぼが魅力的な笑顔を浮かべる先輩。

なんとなく恥ずかしくなり、視線だけで会釈すると音を立てながら乱暴に灰皿を洗つた。

……壁にかかった時計を見る。

時間は、午後7時を過ぎた辺りだ。客が来店するピークは過ぎている。これからは、ゆっくりと店を回転できるだろう。

俺は、濡れた手をエプロンで拭いながら灰皿を乾燥機へと入れていく。

ドアが開く音がし、ベルが鳴った。先輩が応対していた客が帰つたのだろう。しゃがんでいた体を起こすと、伸びをしながら改めて店内を見た。

まず目につくのは、店のど真ん中に走った柱だろう。

それに沿つて視線を上げてくと、ログハウスのよつた、木々がむき出しになつた骨格が見える。

テーブル、椅子の類いも木で作られたもので統一されている。椅子の背もたれにかけられた布がお洒落だ。

木の優しい雰囲気を壊さないどころか、魅力を引き立たせている橙色の照明。

それを受けながら、壁際にあるピアノがどこか不機嫌そうに鎮座している。

それは、耳に聞こえるジャズともクラシックとも取れる音楽のせいだろう。……これは単純に、俺が音楽に疎いせいで分からぬのだけれど……。

じゃなくて、店内のBGMというお株を奪われているからだろう。先輩が引いているときは、あんなにも生き生きしてるのでかい。

……先輩、ピアノひいてくれないだろうか。

こほん、そして、チラシの謳い文句にもある通りに木の爽やかな香りと、珈琲のそれが漂っている。そのおかげで、どこか体が弛緩してしまつような、緊張とは無縁の空気を醸し出していた。

今日も何も変わらない、いつも通りの店内だった。

「それじゃ、私も休憩に入りますね」

「……あ、分かりました」

不意討ち気味にかけられた言葉に 　 といつても、俺がぼおつとしてただけだけど。少し驚いた。

バックヤードに入る姿を横目に、俺は、珈琲豆をマグカップで二つ分用意し、それを挽く。……汗が額に流れっこそばゆい感覚が走る。しかし、拭う余裕がないためほつたらかしだ。

三本の指で器具を持ち、ドリップ用のポットに擦られた豆をしつかりと押し付ける。

これが甘いと、お湯を通す時に落ちる時間が早くなり、味が薄くなってしまうのだ。

ドリップするのに丁度良い時間は……ほかせてもらいます。

これが上手くできるようになるとよつやく厨房に立つて珈琲を作るのが許可される。因みに、一秒でもその時間がずれると棄てられてしまう。意外とシビアなのだ。

店はクオリティを落とさないためなんだろ?けどさ、落とした珈琲を片つ端から棄てられるのはけつこつキツい。

最初は閉店後に練習したなあ……。

と、平行しながらスチームミルクの用意をする。スチームミルクとは、カプチーノなどにのつてあるふあふあした泡立つたミルクのことだ。

今作るうとしてるのはカフェラテだ。

ラテは、エスプレッソにフォームミルク（あつたまつたミルク）を大体グラスの九分目ほどまで注ぎ、その上にカップすれすれまでスチームミルクを入れると最高にうまいのができる。

……不備がないように気合いを入れて用意をする。客にの為に沸かす珈琲ではないが、できるだけ美味しいのを入れたかったのだ。

とつ、とつ。珈琲が落ちる音が響く。

両手にマグを持つている為、バックヤードへの扉を足で無理やり開けて通る。

そこには、先輩が目を閉じて座っていた。

「お疲れさまです」

氣だるげに目を開いた先輩の姿にそれとない疲労を見つけ、無言で、右手に持つた珈琲を差し出す。

「ん、ありがとうございます」

「いえ」

「……それこーちゃんの？ いけないんだ」

左手に持つた珈琲。

休憩する気で来たのを咎めたのだろう。……それを笑つて誤魔化す。客が来てないからいいのだ。

先輩も強く言う気は無いのか、軽く笑みを浮かべると珈琲に口を付けた。

珈琲をすする音だけが響く。

……俺は元々口数が多い方ではない。

先輩も、あまり喋るほうではない。 スタッフ用のエプロン、予備のプラスチックカップやステイック・シュガーなどのアイテム、資料やチラシといったものが散乱する中、一人で珈琲をすすつていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4708o/>

---

珈琲とバイトと先輩と俺と

2010年10月26日05時10分発行